

朗読 GEN の活動紹介

2003年

- 6月 第1回公演 新美南吉の世界「百姓の足、坊さんの足」「ごんぎつね」
- 6月 梅花高校 1年生HR 「ういろう売り」「ごんぎつね」
- 12月 神戸宝地院大学忘年会 於・宝地院
村上春樹「もしよもしよ」「フリオイグレスias」

2004年

- 3月 城北春まつり 於・大阪城北市民学習センター
齋藤隆介「死神どんぶら」
- 3月 アーツコンペ 於・大阪市立中央青少年センター
村上春樹「もしよもしよ」「フリオイグレスias」
- 7月 第2回定期公演 藤田宣永「水に流して」
- 11月 梅花高校 3年、1年HR 「ういろう売り」他
- 12月 神戸宝地院大学大忘年会 於・宝地院
中江俊夫「あと2時間だ」 江國香織「桃子」他

2005年

- 7月 第3回定期公演 妹尾河童「少年H」 山川方夫「夏の葬列」
- 12月 関西短期大学図書館協議会研修会
山頭火「行乞記」 山尾三省 詩「火を焚きなさい」
- 12月 中央公会堂、クリスマス発表会 江國香織「桃子」

2006年

- 3月 師・姉川 明子追悼公演 平岩弓枝「鬼盗夜ばなし」
- 7月 第4回定期公演 中島 敦「山月記」 泉 鏡花「外科室」
筒井康隆「五郎八航空」
- 10月 城北秋まつり 於・城北市民学習センター
村上春樹「もしよもしよ」「フリオイグレスias」
- 11月 梅花高校2年生HR
志賀直哉「転生」 村上春樹「フリオイグレスias」
- 12月 枚方・中宮サロン第1回例会
金子みすず詩 志賀直哉「転生」 江國香織「桃子」

2007年 12月 枚方で公演予定（場所・日時未定）



朗読 GEN に入って 一緒に朗読を学びませんか！

全くの初心者も、少し習ったのでもう少し深めてみたいと思っておられる方も、ぜひ一度見学に来てください。きっと楽しさがわかります。
朗読劇の舞台に立ちたい方も、スタッフとして活躍して下さる方も歓迎します。

お問い合わせは・・・秋山（TEL & FAX 0742-48-3688）
または 辻本（yumi-sab@view.ocn.ne.jp）

2007年
7月14日（土）
14時30分開演
7月15日（日）
13時開演
シアトリカル
應典院

朗読 GEN
第5回
定期公演

本日はご来場頂きまして、誠にありがとうございます。

今年には朗読GENも5周年を迎えます。女性ばかりで演じるには難しい演目にも取り組み、四苦八苦してまいりましたが、皆様の温かい眼差しに支えられここまで歩んで来られたと今改めて思い返し感謝の思いで一杯でございます。又、スタッフや協力して下さいましたの方々のお陰で、ようやく今日を迎えられたと思っております。

今回は更なる飛躍をと、近松門左衛門作「曾根崎心中」に挑戦しました。浄瑠璃や歌舞伎でおなじみであり、ご存じの方も多いため存じます。しかし、原作の通りに語るのはなかなか難しく文楽のように三味線も入らず、歌舞伎のように派手な動きもなく、脚本化していないので内容がどこまで伝わるか、不安ではありました。

昨年、中島敦「山月記」、泉鏡花「外科室」に取り組み消化不良であったという反省が残ったのですが、忘れられてゆく文体、日本語を今に生かす事ができればと言う思いは強くなりました。朗読劇という形で今後のライフワークとして取り組んでいけたらと考えています。それにしても、「曾根崎心中」までいかなくとも思われるかもしれませんが……。

大阪上本町ですと公演してまいりまして、やっぱり大阪を舞台にしたものやってみたかと思つたわけです。それならあの「曾根崎心中」と、団員一同熱い思いが一つになり、本日の舞台となりました。そしてNHK朝の連続ドラマ「芋たこなんきん」の原案者であり、主役花岡まち子のモデル田辺聖子氏の短編をぜひやろうということになりました。

大阪生まれの田辺聖子氏の生地、福島は堂島新地に近く、又古典の造詣も深い方ですので、今日の演目の組み合わせを喜んでくださるかなと勝手に思っております。

どうか大阪生まれの朗読GENの大阪への愛情いっぱい舞台をお楽しみください。

今後とも何卒ご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

キャスト

曾根崎心中

佳恵子	恵子	山田	秋田
多章	浩光	中内	田垣
左知子	美子	水田	清太
由幸	幸み	嶋本	福辻
村岡	岡	木山	山

薄荷草の恋

美子	恵子	佳恵子	多章	浩光	左知子
由幸	幸み	水田	山田	中内	福
本岡	村木	清太	秋田	垣	福
辻山	木村	太田	山田	中内	福

スタッフ

構成・演出	秋山 多佳	衣装	青柳 秀子
舞台監督	佐野 泰広	メイク&ヘア	森安 貴子
照明	加藤 直子	イラスト	桂 瑞子
音響	西角 秀紀	記録	小島 知光
制作	うらきみこ	題字	秋山 多佳



元禄4年（1691）の地図を見ると、河村瑞賢による淀川水系の大改修工事が行われ、堂島川と曾根崎川の整備で堂島、曾根崎新地が開設されたのがわかる。瑞賢は工事に尽力した見返りに新地の利権を得たのである。堂島新地には遊里ができ、その天満屋の遊女お初と、内本町の醤油屋の手代徳兵衛が元禄16年（1703）曾根崎の森で情死する。この心中は、主人平野屋忠衛門の甥である徳兵衛が、主人の妻の姪と妻あわせられて江戸店をまかされる事になったが、お初との恋のために、これを断り、お初は徳兵衛への心中立てをして死ぬ、ということになっている。

主人で叔父なる人の好意ある申し出にそむいて死ぬというのは大坂町人の世界では「あほ」としかいいようのないものであったとか。確かに実質で考えるところでも損であり、無分別ではある。昔も今も恋は人から分別や、常識を奪うものと見える。

この話を直ちに劇化して、翌月道頓堀の竹本座で上演したが、竹田出雲と彼に呼び寄せられた近松門左衛門である。この時近松は既に51才、その後竹本座の専属作



『曾根崎心中』の口上番付(半古雅志より)

者となり、世話物の名作を次々に発表、最後の「心中宵庚申」までその数24編を数える。経営不振で悩んでいた竹本座は、「曾根崎心中」の大ヒットで全ての赤字を返却した上かなりの利益も確保する。

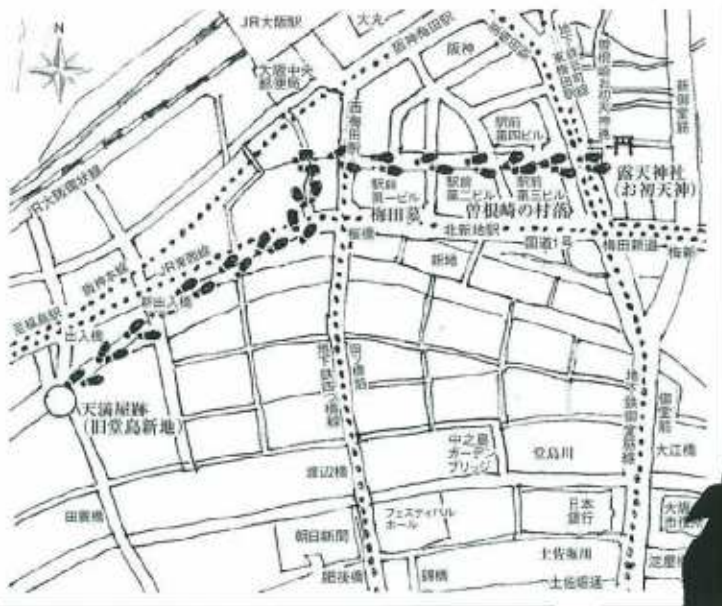
それまでの浄瑠璃はお家騒動や、曾我兄弟物とか武士を主題にした時代浄瑠璃ばかりであり、庶民の生活を扱った世話物がなかった。近松の描く新しい世界は人々の共感を得、大きな反響を呼ぶことになったのであろう。

名もない庶民、とりわけ過ちを犯してしまう者、罪を犯して心中する羽目に陥った者など、社会的に冷視を浴びる人たちに熱い思いを投げかけた近松には人間に対する温かい眼がある。

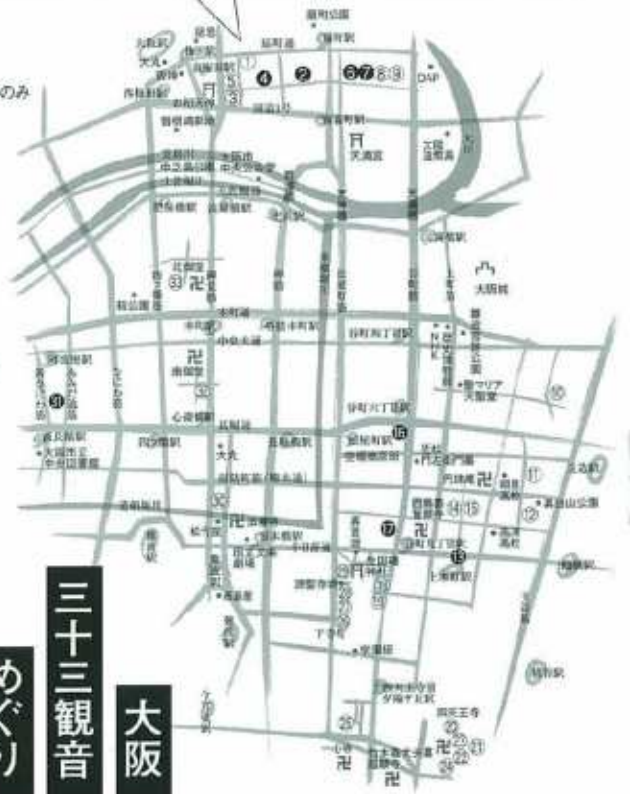
お初 徳兵衛

道行きルートを

たどる。



- ① 太融寺 北区太融寺町3-7
- ② 長福寺 現存せず
- ③ 神明住持寺 現存せず
- ④ 法界寺 北区尾張野町15-2
- ⑤ 大鏡泉寺 現存せず
- ⑥ 普渡寺 北区与力町2-5
- ⑦ 普東寺 北区与力町1-7
- ⑧ 玉造稲荷神社 中央区玉造2-3-17
- ⑨ 興徳寺 天王寺区扇差町2-17
- ⑩ 慶依明院 天王寺区扇差町8-31
- ⑪ 通明院 生野区へ移転
- ⑫ 長安寺 天王寺区城南寺町5-13
- ⑬ 普安寺 天王寺区城南寺町6-29
- ⑭ 願寺 和歌院威音堂前の礎石、共に現存せず
- ⑮ 重誓寺 現存せず
- ⑯ 本誓寺 天王寺区生玉町3-6
- ⑰ 普提時 天王寺区生玉町4-10
- ⑱ 六経堂 四天王寺境内
- ⑲ 金堂 四天王寺境内
- ⑳ 講堂 四天王寺境内
- ㉑ 万燈院 四天王寺境内
- ㉒ 清水院 天王寺区待人町5-8
- ㉓ 心光院 天王寺区下寺町1-3-68
- ㉔ 大覚寺 天王寺区下寺町1-3-77
- ㉕ 金臺寺 天王寺区下寺町1-3-88
- ㉖ 大津寺 天王寺区下寺町1-1-27
- ㉗ 三津寺 中央区心斎橋筋2-7-12
- ㉘ 大福院 現存せず
- ㉙ 難波神社 中央区博労町4-1-3
- ㉚ 御堂神社 中央区淡路町4-4-3



三十三観音 大阪 めぐり

堂島新地の天満屋の遊女、お初は三十三親音廻りのあと生玉社の茶店で、得意先回りをしていた醬油屋平野屋の手代、徳兵衛と出会う。二人はかねてより深く言い交わした仲だった。お初が呼びとめ、最近なんの音沙汰もないことを恨んでくどき泣くと、徳兵衛も泣いて一部始終を打ち明ける。叔父にあたる店の旦那が段取りをつけた結婚話を断ったところ、立腹して大坂追放を言い渡されたうえ、知らぬ間に継母が受け取っていた持参金の銀二貫目の返済を迫られた。徳兵衛は苦勞して継母から持参金を取り戻すが、友人の九平次から窮状を訴えられて、その銀を貸したという。お初は、もしも会えなくなるのなら死んであの世で結ばれるまで、と応える。

そこへ九平次が友連れで通りかかる。徳兵衛は銀の返済を求めるが、借りた覚えはないとの返事。証拠の証文を見せると、九平次が落とした印判を拾って偽造したのだと言われ、ゆすりの汚名を着せられる。だまされたのを知り、怒った徳兵衛は腕ずくで銀を取り返そうとするが、相手は多勢。さんざんに打擲された徳兵衛は、大事の銀を奪われ、面目も失

い、身の潔白を証明するための自害をはのめかして立ち去る。

客の手で天満屋へ連れ去られたお初が、女郎たちから聞かされる徳兵衛の噂に胸を痛めていると、忍び姿の徳兵衛が表に現れる。打ち掛けの裾に隠し店の内に入れ、縁の下に忍ばせて、お初が縁に腰かけたところへ、九平次が来て徳兵衛の悪口を言いふらす。お初は氣丈に言い返しながらか、縁の下で腹を立てる徳兵衛に、足を使って死ぬ覚悟を問う。徳兵衛はお初の足首で喉笛をなで、自害すると知らせる。ただならぬ様子に氣味が悪くなった九平次は帰る。店仕舞いとなり、夜更けになって死に装束に身を包んだお初は暗闇の中、徳兵衛と手を取りあい、ひそかに店を抜け出る。

二人は暁の鐘の音を聞きつつ、来世での夫婦を誓い、梅田橋を渡って曾根崎天神の森にたどり着く。徳兵衛はお初の喉笛を脇差で刺し、自分もお初の剃刀を喉に突き立てる。

二人の死は未来成仏疑いなき恋の手本と世の人々に言い伝えられる。

心中の背景



情死としての心中が流行するのは元禄16年から翌年にかけてであり、曾根崎心中を皮切りに近松の心中物がヒットしたことで大いに關係がある。

しかし、それだけではなく人々がそれを受け入れやすい時代背景があったと言えるだろう。元禄の世は、泰平、繁栄の世と言われている。確かに経済の発展はめざましいものがあったが、しかし、元禄末期にはかげりが見え始めていた。

その理由としては、幕府経済の破綻、物価高騰、通貨の不安定などがある。また金が金を生み出す時代になり、商人が力を持ち、組織を整え、市場体制を固める時代となっていたことがある。このような時期に問題があった

主家を離れば、他家に勤めることもできず、行商人か、日稼ぎ位しかできなかったであろう。商家の手代の身分を離れ、大坂を離れては生きていけない、先がないと徳兵衛

が思ったのもこの事から理解できる。

心中をした者は商家の手代と遊女が多い。遊女といっても京の島原、大坂の新町のような格

式のある遊郭の女は少ない。心中に追いつめられて行くのはやはり社会の下積みにいる人たちが多くのである。大金を返すまでもなく、信用も失った徳兵衛、金に縛られた新色里の遊女であり、嫌な男に身請けされても断る事などできないお初、その2人が、もう違うこともできない先の望みもないとあれば、あの世で結ばれる事だけを願って心中に走るのも無理もないと人々は同情し、純粋な恋の成就として共感したのであろう。

メモ

銀二貫目
江戸が金を通貨の基本としたのに対し、上方は銀をもって通貨としていた。銀六十匁が一両で、そうすれば一貫目は三十三兩あまりとなる。今でいえば三百万円位である。

時貸し
徳兵衛は九平次に銀二貫目を当座貸しにする。普通は毎月手形を用いるが、信用ある間柄の一時の時貸しには手形を入れなかった。大事な金ではあるが思えば一つで貸したのである。

メモ

道頓堀・竹本座
近松が大坂へ移住して活躍を始める時期は、文化の基盤が京都から経済発展する大坂へ移行して行く時期とも言える。近松は大坂の町に育って育って、晩年は大坂の文化を育てていく役割を果たしたのである。

この時代道頓堀には7つから8つの橋が並んでいた。橋は大規模のシンボルで周辺の小さな見世物小屋も活況を呈していたのである。近世では世界でもまれなもちろん日本では一番の芝居町であった。

【参考図書】

小学館大系日本の歴史10
「江戸と大坂」
大阪人
グラフィック版「心中天網島」
週刊朝日百科「日本の歴史」近世
日本古典文学大事典

遠距離恋愛のひかると田口。久々に休みをとって大阪に帰ってきたひかるは田口に連絡し彼のアパートで過ごす事にする。しかし、なかなか一緒に過ごせない。不満が積もった2人は、男は勝手ね！女こそ勝手だ！と喧嘩になる。さてどんな結末が待っていますか……。男に気兼ねしつつも仕事に励む少し新しい女、好きな女に多少の理解はするもののやっぱり側においてほしい男。田口の友人小山夫婦もからませて、働く女の結婚観や、仕事

への思いが描かれている。それにしても大阪弁ののしり言葉の迫力には驚いてしまう。柄の悪い田口だが底に流れるあったかさがいい。朝の連続ドラマ「芋たこなんさん」の夫のモデルは当然田辺氏が36年間連れ添ったカモカのおっちゃんであろう。もちろん夫、川野氏が田口のように柄が悪いわけではないとは言ってもないが、格好を構わない、正直で、ざっくばらんな田口は、大阪人田辺氏の愛すべき男の1人なのではないかと推測しているのである。

薄
荷
草
の
心

ペパーミント



近松門左衛門

(1653~1742) 72才で没。墓は尾崎市法濟寺と大阪市南区法妙寺跡にある。

越前吉江(鯖江)藩に仕えて三百石取りの侍であった杉森信義の次男として生まれるがやがて父が浪人したので故郷を離れ15、6才で上京、公家方に仕える。推測では25才頃には浄瑠璃作者としての修行を始め、「世継曾我」で名が出る。その後歌舞伎の雇付き作者となり、異例なほど作者の立場を尊重した坂田藤十郎との提携を通して、優れた狂言を生み出すのである。しかし、藤十郎の健康の衰えと共に歌舞伎が沈滞し、51才の時「曾根崎心中」の大当たりによって再び浄瑠璃の制作に専念する。そして長年住み慣れた京都を離れ大阪に54才で移住する。以後最晩年に至るまで年に4、5作というペースで、深い人間洞察と、瑞々しい情感に溢れた佳劇を生み続けたのである。

田辺聖子

昭和3年(1928)3月27日大阪市此花区(現・福島区)に生まれる。生家は祖父の代から写真館を営み、好きな本は父親のついでで買える恵まれた少女時代を送る。神奈川女子専門学校、国文科(現大阪樟蔭女子大)を卒業。1945年大阪大空襲で自宅全焼。終戦4ヶ月後に最愛の父を失う。母と弟妹の生活を支えるため大阪の金物問屋で働く。1956年「虹」で大阪市民文化新人文芸賞受賞、1958年「花鈴」が「婦人生活」懸賞小説に当選。1964年「感傷旅行」で芥川賞受賞。以来軽妙洒脱でユーモラスな小説を主体に歴史小説、評伝、古典ロマンなど様々な分野で活動。女流文学賞、泉鏡花文学賞、井原西鶴特別賞、吉川英治文学賞、文化功労賞などを受賞する。

今年、母校大阪樟蔭女子大内に「田辺聖子文学館」がオープンした。